

音楽紙芝居でつづる

ベルリオーズのサイケデリックな心象世界

文・写真 山口敦

クラシックの名曲をより深く知る。マイクの音楽ワークショップは、「実際の楽曲にアプローチすること」と、「その楽曲と共通する要素を使って自分たち独自の音楽を創ってみること」の二つの体験の組み合わせからなっています。

そして「座学として勉強すること」と、「体を動かしてみること」のメリハリあるミックス。だからワークショップはオモシロイ！今日は文明の利器(?)スマホも登場です。

《幻想交響曲》の背景を知る

「恋に絶望したある若い音楽家が、麻薬(アヘン)を飲み、自殺を図る。しかし致死量には足りず、彼はさまざまな奇怪な幻想を見る…」という、ベルリオーズ自身の失恋体験から生まれたストーリー。そこにはいろいろと刺激的なキーワードが散りばめられています。

◆第1~3楽章の聴きどころを駆け足で

第1楽章を聴く。「固定概念」と作曲家が呼んだ、愛しい女性を表すモチーフ。それは以後形をさまざまに変え、全曲のいたるところに出没する妄想です。第2楽章は「舞踏会」。日本フィルのメンバーによる弦楽四重奏がワルツを奏で、参加者たちが手をとって踊ります。体を動かすことで、参加者の表情ががらっと変わります。そして第3楽章では、ベルリオーズの面白い音響効果を紹介。2本のコール・アンブレが、一本は舞台の上、もう一本は舞台裏。山と山でこだまし合う、どこか懐かしい対話。しかしこの楽章の最後に、おかしなことが起こります。

4月29日(金)、横浜定期
会員の方を対象に、《幻想
交響曲》のワークショップ
を開催しました。



《強弱の極端な強調がロマン派の表現法の特徴のひとつ。「固定概念」(愛しの女性のテーマ)について、強弱記号のある、ないをヴァイオリンで弾き分けます。》



《弦楽四重奏による第2楽章に合わせ、みんなでワルツを踊ります。》

返事が返ってこない。そして遠雷の轟き。これを境に、主人公の運命は転回点を迎え、どん底へと転がり落ちていく。さて、これからが今日の本題です。

◆ベルリオーズが描いた「音の風景」は?

ここで参加者は2グループに分かれます。ひとつは第4楽章、もうひとつが第5楽章。4人の楽員がファシリテーターとなって、それぞれの楽章の物語を象徴する場面、すなわちベルリオーズが描く「サウンドスケープ(音の風景)」を拾いだしていきます。

●第4楽章《断頭台への行進曲》

～スペクタクル・ショーとしての公開処刑。彼女のもとへと主人公は行くのか?～

愛しさのあまり彼女を殺してしまった主人公を、死刑台へと引き回す兵士

たちの太鼓やファンファーレ。まわりで高みの見物を決め込む市民たちの歓声や嘲笑の声。

処刑寸前に彼女の幻想が現れます。そのとき主人公の気持ちは？ワークショップの参加者からはさまざまな解釈が生まれました。「死んで真っ暗闇に？」「いや、死ぬことで彼女のもとに行ける。彼は本懐を遂げ、笑いながら死んでいくのでは？」

さて、この異様な「行進」とそれを取り囲む群衆、そして主人公の心理。これらはどういう構図で語られるのでしょうか？

●第5楽章《魔女たちの大宴会》

～調子っぱずれの乱痴気さわぎのなか、自分自身の葬式を眺める主人公。～

真夜中に啼く鳥は不吉の予兆。魔女や化け物たちの宴会のなかに身を置く自らの姿を主人公は見つけた。そしてグロテスクに変わり果てた調子っぱずれの恋人のテーマ。鐘が鳴る。自分自身の葬式。魔女たちの金切り声や歓声に、骸骨がカタカタと音をたてる。そこでは、レクイエムの聖歌すら、パロディとして滑稽に鳴り渡り、ダンスミュージックと化していた。

主人公はこの乱痴気騒ぎのまっただ中に居て、もうひとりの主人公がそれを眺めているのです。

◆魔法の幻灯機を現代に

ベルリオーズはベートーヴェンの第9を聴いて大きなショックを受けたそう。幻想交響曲を書いたのは第9初演のわずか6年後でした。第9をどう越えるか？優れた指揮者でもあったベルリオーズは、管弦楽の書法や奏法、そしてオーケストラの配置について実験と実践を重ねた、偉大なイノベーターでした。同時に楽器も飛躍的に発展。管弦楽が一大発展を遂げた歴史のまさに中心に、ベルリオーズがいたのです。

そしてベルリオーズの時代に、実はもうひとつのイノベーションがありました。写真技術の急速な発達とともに生まれた「マジック・ランタン（幻灯機）」、すなわち写真を投影する紙芝居。



《魔女たちのクレイジーなダンスパーティをスマホで撮影。》

今でいえば「スライドショー」。後のサイレント映画へとつながる技術で、当時はこの映像とともに音楽の生演奏も行われていたそう。

マイクはこの「当時のハイテク技術」を今日のワークショップに活用しました。もう一度、第4、第5楽章の2グループに別れて行った作業を整理してみましよう。

- ①ベルリオーズが示したストーリーに従い、3つか4つの象徴的な場面を選び出す。
- ②その場面の光景を参加者が身体表現（ジェスチャー）で再現し、スマホで写真撮影。
- ③思い思いの楽器で、ファシリテーターとともに、原曲にあるモチーフ（恋人を示す「固定概念」と、各楽章の主題のフレーズ）を使いながら、それぞれの場面にふさわしい効果音を考え、重ねていく。
- ④成果発表。スライドショーの映像を前に、演奏。



《「断頭台への行進」というシュールな心理劇を音で表現。》

ベルリオーズの描いたドラマをいちど静止画として再現し、それに再び音をつけていく、というプロセスで、サイケデリックでシュールな世界観を共有する。こうして、《幻想交響曲》の2016年横浜バージョンができあがりました！